

詩

物

是

矣

卷

之

一

京城

梅盛

如泉

常牧

我黑

似船

言水

方山

晚山



今所註之二十有六卷每句雖可施註不遑  
悉記唯其點有太過不及之不同因到  
其處各註之故未有一句無註才看  
一二卷不能通全當濫觴以至無底  
者也評中有甚誤者粗拾收列一次  
如左

- 發句為長點
- 脇句不用正花
- 第三恨字不為難
- 第四不知無誹言





○草、舞臺、之句、見有種々異

○馬廻之句不知打越惡ラ ○家櫻之句不知無誹言

○生、纏之句不知輪廻ラ ○競狩之句以為馬或基ト

○山伏之句犯同字ラ ○眺望之句不改重煩ラ

此外テ余於葉之差句意吟弄之善ト惡

不可勝計此所以不可容易看過也

此語削之上與中々語  
と推してと云ふは受流  
為右流と名仲並世能  
得と云ふ不合何れと云ふ  
と云ふは云ふ新お違を  
と云ふは云ふ係若し  
今と云ふは云ふと云ふ  
又非ありは非邪の中  
及形は云ふ係何れと  
色人見多るは補の  
第云と云ふ句句表  
と云ふは云ふと云ふ  
いりりりりりりりりり  
言ふと云ふと云ふと云ふ  
老人見多るは補の  
非と云ふと云ふと云ふ  
追替何れと云ふと云ふ  
品紙と云ふと云ふと云ふ  
と云ふと云ふと云ふと云ふ  
後いりりりりりりりりり

三日月れあうとさる科る紙寫

丸のりりりりりりりりり

杖は切并のりりりりりりりりり

任指とかしりりりりりりりりり

此いりりりりりりりりりりりりり

弟たの舞臺の衣おれりりりりりりり

何れと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ



聲は重寢よ花まゝにせ  
姉のふり鏡もあつたをいふ  
願ははしきや又むすぶよ  
秋来るともあ陳所つとて町造  
後宮もは月のはやき  
親の目よあまらう知るに今  
すゝみこころ馬廻りりか

言ふはあはれつきゆくあはれ  
お智れ旅籠の味淡きこころ  
ひ眠いはりわと寝んぬ極  
折紙くは着るあはれ場  
まぬれ是よ浦の鉤され  
親と者よらんをぬる部  
いふはあはれ極も春極



社よりあふる法糸の奇  
素ら歌鳥を女らわやし練れ内  
乱程あつて茶 待定  
はううい又も響よまらるる  
人申しそとを恥乃おほされ  
憫じ程思のうこ持ささし  
氣と若うくも雲よ松の下層

山伏のた刀うううううう月  
おりふ矢は外れ麻討さりたり  
露あふれうううううう  
嵐うもある衣よ望河うう  
死のあはれ念佛あし打こり  
つぎううれぬいさうう  
乱流うううう眺るふ双あ



引多と行へじ蝶の翩翩

十九点

梅盛判

以詠吟書をたし枝見はくも  
うしあしむそくし作意はま  
らぬし心秘をたさうりうし  
白しむし書きたはらいつる  
氣こくしれ糸句おふしは  
きらつてねも極くふ直

散句無点

腸言うして誰かよ  
し也連排は難き  
句は六點とらんもや  
く歌法也是一卷の頭  
なりぬ也そそ是法  
人う又い失念り

第三房四 平点

ふむとのとらる白平珍也  
い表より長はなること  
ハ腸ありと自註しを  
ありとすも同之當句  
ありとんかたれらるる  
をとり真とるん

草乃舞卷

腸書は神更稿と  
白素と史如し書入  
せしむるよハあふり

三日月のありとる新う紙書

花かんりりれりも草乃卷

杖よ切并のうふい書あり

何れとあしむる人かんとあふ

山いらのさく縁は海をたると

草乃舞卷の衣お取らるる

神事終るよ



てき急有へし三杯  
変結い表は不苦や作  
者ハ自注ふよあけす  
そく假の心也物子真  
行草ありし草あり  
又ハ詠草草葉と云  
ふくし是は終く同と

後堂とて 手珍あり  
打ちの脇書とて  
は月教も和まらる  
と打ちとて和まら  
みまきし露白の月  
くくくくやをや書  
入の誤るる

中みまきくハ  
は白打ちの心を  
く長点くをくく  
まの白まきとて

家さくく 無点也  
脇書あり内白  
取ハ外れ巻く可  
行

若草の句  
脇書よはさきなり傘  
のくけも縁をいとの  
くくくくくくくく  
まや京くくくくく  
まハあれと田舎る  
のまはる人まらる

約文く 宗成くおぼら志られ

年ハ 登彦後く枕まら珠

姉の 入る後けあわさ立ぬ

踊ら ぬきく又じすふ

秋も ちりる隙いつき町造

残堂も ころは月のさ念け

親の 月みあらしらるる今共

孔の ころ馬海りり

乱の ころあれつ道ゆく

お智の 籠の飛ん味淡ら

け眠ハ けられん人乱様

所 作く 若草の場

若草の句  
脇書よはさきなり傘  
のくけも縁をいとの  
くくくくくくくく  
まや京くくくくく  
まハあれと田舎る  
のまはる人まらる



まゝぬれ星の浦を新とれく

① 新す者ふ人きぬ 草の針

いづのけくまおれ橋も音あし

社りしるる法系から尋

乳ら新の女うわや一練大内

② 無難とく 菜 仔 定

はかへん又も響はしむるゆき

人中しとて心かたれゆき

懐心程まのしと結さきんうり

③ 氣と煮く 草よ 松の 下 居

ふ伏のちカウウウウウウウ月

ねもふ夫つふ代 麻射さうりせり

つらうらうら 空点を修

也い句は新ニもわり  
つ連の方とと定あよ  
らまうく書入なりまこと

あまそん也

競走 空点脇書也也

たれをこそ包あつ由

さく書入あつあつあつあつ

あつあつは又定まらう

競走のまおれ巻もあ

ふ伏の句 空点あつ

あつあつ下電とわりむ

百人し下文まよまら

月しけりまきうら悦句

あましく落月斜月降

月と書ゆくやあしん

當句は下文まよまら

あつあつ〇ふ伏のまら

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつ







發句 年長なり

脇書も作者の自  
作なりしと云ふと又  
と科と根と句作を  
ナリ

第三 無点季序也  
脇書何れ向ひし句  
節真と云ふなり

第五 長点掬  
ナリしり

日月のありとて科也紙也  
此句のあり  
烈のりしりれれをえまをせん

杖の切并のりしりみいまあり  
烈のりしりれれをえまをせん  
烈のりしりれれをえまをせん  
烈のりしりれれをえまをせん  
烈のりしりれれをえまをせん  
烈のりしりれれをえまをせん  
烈のりしりれれをえまをせん  
烈のりしりれれをえまをせん

踊らん

是亦い徳方の息を  
より一作者の自注  
より一予も因之  
ナリしりしりしりしり  
く村よをい白き  
つと又むとよの  
詞

とらりしりしりしり  
けりしりしりしりしり  
もれ奥と云ふ

舞の足履よ抱りしり  
烈のりしりれれをえまをせん  
烈のりしりれれをえまをせん  
烈のりしりれれをえまをせん  
烈のりしりれれをえまをせん  
烈のりしりれれをえまをせん  
烈のりしりれれをえまをせん  
烈のりしりれれをえまをせん







くさつ月  
百首尾へくしあや  
あつの下文字よま  
あきやう件あしあや

ましくあや衣  
死のあや白  
長息作者の自註  
まきうらうし

山伏のあや  
くさつ月

れりあまはけあの藤射あや

あやあまはけあの藤射あや

あやあまはけあの藤射あや

あやあまはけあの藤射あや

あやあまはけあの藤射あや

あやあまはけあの藤射あや

あやあまはけあの藤射あや

列墨正  
内長拾  
内珍重六

母藤如泉列

午端午







親の月小月取の脇書  
月のまげとてまき  
ことし何れもは  
まや不富まやけ  
小回とけりし

書字の点句也  
脇書の取真のまを  
みる

流るるるるるる  
脇書取らぬ  
誹のま葉のふく  
おとつとてまは  
未修

取らと者 無点なり  
脇書取らぬの若草  
よ草外の一字拵合と  
や珍しとて不修  
い先達の控かか  
。労律と書リ  
クタヒ

親の月小月取の脇書

月のまげとてまき  
ことし何れもは

可みささく馬まのり

大井 恒

乱すのあつまゆくるあ

お智の臨鑑の味清ら

此眠いけりつとて人か

所 活くま若草の場

取らと者 無点なり

取らと者 無点なり

取らと者 無点なり

取らと者 無点なり

取らと者 無点なり

取らと者 無点なり

乳母のし



ほろろの句歌か

ほろろの句歌か

競歌 加字を

人申しぬの恥のねりて

情の程はのこ勝てぬ心

あふと煮くく雲よ松の下層

ふ伏のたりのり月

れとふ夫つ不れ鹿射さるる

くらり月

あふは同字を  
まてりてしを身り  
併を力いそりて  
月をくわりて  
一文字うんや  
あふとや如何

あふはねのねりて

あふはねのねりて

あふはねのねりて

あふはねのねりて

あふはねのねりて

あふはねのねりて

あふはねのねりて  
あふはねのねりて  
あふはねのねりて  
あふはねのねりて  
あふはねのねりて



三十之墨

長十四

内珍十二

秀五

言水判

耳心

不流

教句 無忌脇す

ふりうへちすり手  
同書く紙馬坊く  
ふりうへちすり手  
四つの子を多めし  
三月の三日の月日  
ふりうへちすり手

中三  
服すあふゆ

身五 長息の歌  
ふりうへちすり手  
種よたあ

三日月のわりこみ料也紙馬

花のりりれりも書家の巻

杖の切并りりも春の巻

倒右とほじり人のとこり

ふりうへちすり手  
進位よ 益せんや

引の舞巻れ衣おあうりた







春のふし目くつ浦新のま

船と者よんとあまの舟

しらほいふたは持とあまの舟

船くまの法系り奇

新の船を女うあや練の舟

意程とあまの舟

ほろりて 鹿島  
れ馬也い船かの巻  
よま

しらほいふたは持とあまの舟

うき趣因あまの舟

人かあまの舟

舟をかあまの舟

舟と者あまの舟

ふたのち力ううううううう

わらふあまの舟

競駈  
うううう

右二万とてい馬島  
舟也船うううう



海を渡る舟の心算の翻

山所の長は射矢也

舟の心算の翻

死の心算の舟の心算

作者の自筆の舟

死の心算の舟の心算

舟の心算の舟の心算

舟の心算の舟の心算

舟の心算の舟の心算

舟の心算の舟の心算

舟の心算の舟の心算

舟の心算の舟の心算

# 舟の心算の舟の心算

朱長二

星長二

長五

輪六

沈内

常教判







とくみさく 平魚  
家さく  
い難おれまといふ  
る

若草 長息如何  
おろしうらまをうら  
と結く味いで息い  
るさく作者の自叙  
分明よわくは後方の  
息の長

形傍の句 平魚  
脇書れ執言水息の  
巻よあ  
惣く平魚長息の  
く頭へ平あうらり  
不及くさう所よ  
ふらして改めさう別て  
平魚の息川くこの奥  
わらぬ也脇書よ取  
て平とくけ又い原表  
とまへく平魚の  
とくりりして結く味  
いでい道のさく人  
詠ゆさく

志種 長息  
作者の自叙は用

親の目よあまのつらき今廿

わがしめりるさく

しんみさく馬まうらり

高やうあめつさくあ

お智れ臨の味流さく

初めりし風流

洲賦うらわとまうらん丸極

さくわらさく

所しき若草の場

すまうら人のつを

去取の思りふ浦新とて

長息

和と者くみとわさ外

文字んさく

いんけは宮古の橋も吾あ

秋りらみは清おの奇

あら親の女うあや練の内

長息

志種さく素行足

あまの巻れさく



はしりしり

脇書らんえうしりしり  
尾におおきくまき  
まうかき若しりしり  
はちりしりのかき別  
をけり

競駈の事

外巻三妻

くさり月 意

脇書をたり

勝新ぬり

服すよ白意とあき  
めく手息をのい味  
い面白く作者の  
自註をすも甲

花海くさる眺る

脇書面白く  
方以西吟のふし回

つらうしりしり書いしりしり

愚意よりしりしり  
首尾を何

人の中しりしり私におはるしり

西しりしりしりしりしり

あきと書りしりしりしり

ふ休れちりしりしりしり

くさり月降行月しりしり  
あきの下は白句としりしり

村まふまつかれ麻討しりしり

あきあきしりしりしりしり

常陸の食の行あきしりしり  
何しりしりあきしりしりしり

あきあきしりしりしりしり

あきのあきしりしりしり

あきしりしり

あきあきしりしりしり

花海くさる眺るしりしり

眺るしりしりしりしり  
あきしりしりしりしり

あきあきしりしりしり



愚問雲滿三十之内

長十四  
弥五

舟叟子

我黒判

車心

教句 壹行ゆく平也

とうきり形い句ま  
そまきまうまそ  
まや一巻の頭され  
ましく味いくも  
まをと脇あふ

脇帯之 善悪の服

帯これ巻よあ

佐病と 脇帯は排言

ひ批言のいかり  
くふふあはる連致  
の巻り

ひ連よをきつりし  
ふれい云よ不友

之日月の何くといの柳を紙巻る

巻のまきりたれも葉の花

杖と切并のうらうらまみして

佐病とやひる人のよとらひ

ふいふのあし移し酒危なる所

葉のたれ葉巻のたれ花うらうら











死しのあはれ念佛ねんぶつをふらふうらら

死しのあはれ念佛ねんぶつをふらふうらら

死しのあはれ念佛ねんぶつをふらふうらら

死しのあはれ念佛ねんぶつをふらふうらら

死しのあはれ念佛ねんぶつをふらふうらら

死しのあはれ念佛ねんぶつをふらふうらら

つとてまゐる  
唐紙の鳥とて  
この作者の自註  
をも同く之

死しのあはれ念佛ねんぶつをふらふうらら  
脇書の公我黒西吟  
い

# 戲墨三平

内

長 五

朱丸 一

陰丸 一

珍重 十一

招鳩軒

方心判



發句 脇書作者の  
自注は白一係るふ  
をいふこと新い深

第三 無息して脇  
書を也

草の舞卷

脇書は春日の里れ結  
とけとあふとわれ并  
まうやとく新の結と  
まきとあふとあふと  
まきとあふとあふと  
似知の書入とあふと  
衆子

脇  
書  
自  
注  
は  
白  
一  
係  
る  
ふ  
を  
い  
ふ  
こ  
と  
新  
い  
深

二日月にありしと紙を  
陽の光を照らすと紙を  
のらむか

杖の切并のうらみ  
一句の心作意よりかかれし  
とこのやうの氣味

風を吹かす人のよき  
打つての杖をよむ水にのん句  
くれまてくはるはりし  
るはりし

草の舞卷の家  
まきの里れ結とけとあふと

ゆきとあふとあふと

草の舞卷に枕を

姉のうらみとあふと

踊らふとあふと

杖の切并のうらみ  
懐後のきし  
髪のをけりし  
やう

残雪は白く月のはり



すみろく 無忌  
長存也 脇書あり  
白鳥

親の目よあまらまきく今女

すみろく 無忌

親の目よあまらまきく今女

親の目よあまらまきく今女

乱極 平珍也 珍  
白頭 平珍也の巻よ  
考

乱極 平珍也 珍

春の夕日 平珍也 珍

秋の夕日 平珍也 珍

秋の夕日 平珍也 珍

秋の夕日 平珍也 珍

秋の夕日 平珍也 珍

秋の夕日 平珍也 珍

秋の夕日 平珍也 珍  
作者の自伝や定  
めらるゝとわり見  
本の家句の仕合たる  
点あり



はうううう

脇書は人傳とあり  
むえううう一説方れん  
よううううては  
人論は定り敷い敷  
とくううう物ううう  
とく

さういりり 平伝

加茂の五日のしむき  
ううううう競るしむ  
まうううい美本後  
巻ううう

ふ伏のまかうう

眼まかうう一説とう  
ううううや百早と福  
うううふ伏のむう  
うううい是又跡一但  
おらうと競馬とやま  
まれば非彼のうう

はうううう又し響にううう

山雲とさ里のううう  
人傳やううう

人中人やい恥のけはうう

あしうううのうう勝さうう

か茂の五日の

あくと者ううううう下電

ふ伏のまかううううう月

サうううのううう

おらううううの應射ううう

あしうううううううう

あしうううううううう

あしうううううううう

別巻の陸をいハ用章ううう  
あしううううううう

あしうううううううう

あしうううううううう

あしうううううううう

死のあのを解  
脇書作者の自伝は  
同し

つとそうううう  
あしうううううう  
あしうううううう  
あしうううううう  
あしうううううう  
あしうううううう  
あしうううううう



深點字十九

内

長八  
弥五

瓜木

晚山刊

三十一



110X  
144  
5